中世の朴坂越（二俣越）を探る・結

塩谷　忠士

１．はじめに

令和６年元日の能登半島地震から３年目の春を迎える。地震と９月豪雨で被害を受けた方々には心からお見舞い申し上げます。地震で足の踏み場がなくなった我が書斎の後片付けも其方退けに、奥能登の山城の被害が気がかりで道路の復旧状態を確認しながら令和７年春までに県内６０城を駆け回りました。その件は機会があれば別に報告したいと思いますが、被害調査が一段落したことからきくざくら第３３号「中世の朴坂峠を探る・緒」（以降「前回」という）の続きとして、前回朴坂峠付近で見つけた峠道を踏査し、金沢市と南砺市の県境（加賀と越中の国境）地域の峠道の全体像を考察しようと思います。

今回の要点は以下３点になります。

1　前回発見した朴坂峠付近からの峠道はどこに続くのかを探る。

2　中世以降の釜中越の道筋を探り、朴坂越と釜中越の分岐（合流）地点を再考する。

3　金沢市と南砺市の県境地域の峠道の全体像から砂子坂道場と荒山城の峠道との関わりを再考する。

２．赤色立体地図にみる朴坂峠付近

令和７年夏も暑い日が続きましたが、最低気温のほうは前年よりも早く下がりましたので１１月中旬には下草が枯れて山に入れるようになりました。今秋東北では熊出没が続き大変な騒動でしたが、北陸は落ち着いた状況でしたので鈴を付けて山を歩き回りました。幸い未だ熊には遭遇していません。

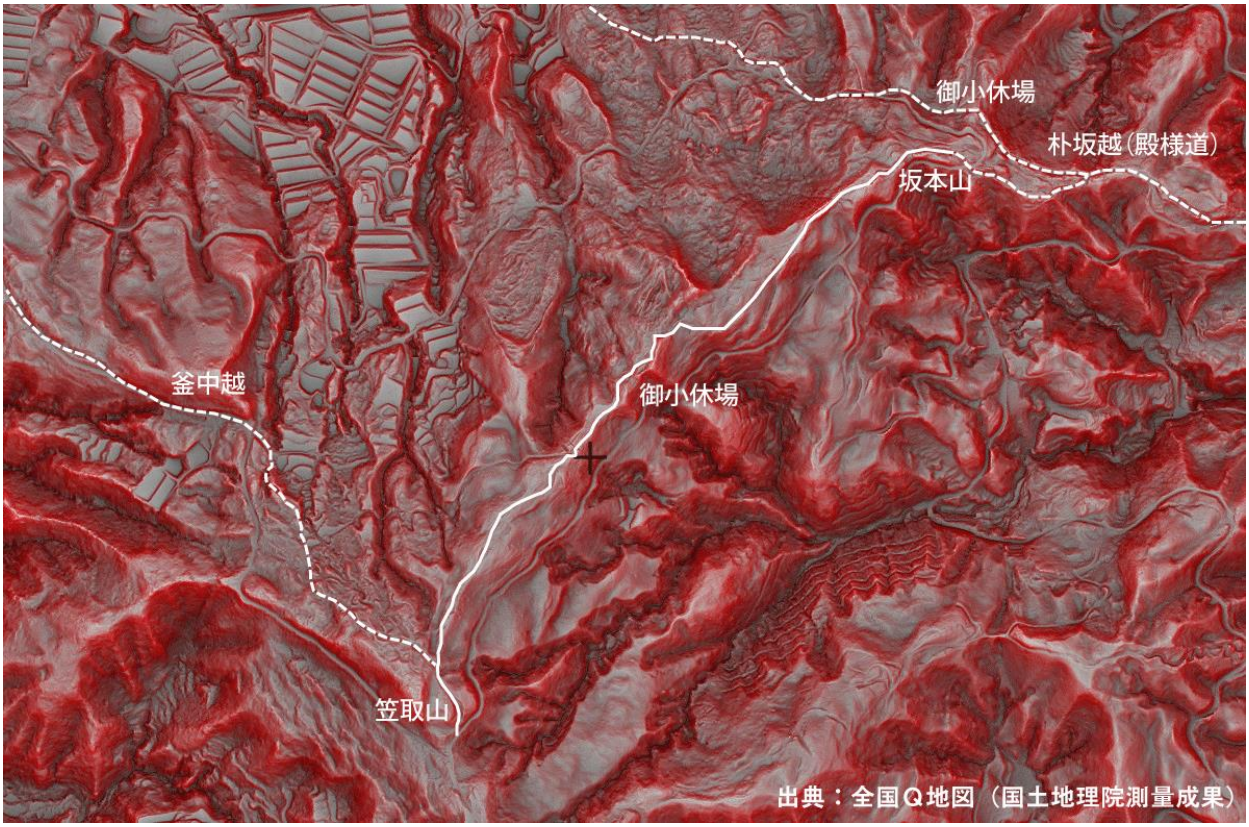
山城の縄張調査では数年前から赤色立体地図を用いることが増えてきました。赤色立体地図とは傾斜の急な面ほど赤く、下地の白は尾根（凸部）を明るく谷（凹部）は暗くなるよう表現した地形表現手法のひとつで、直感的に地形の起伏が分かることから山城の曲輪平坦面と防御構造物である土塁、堀を地図から識別することができます。平成１４年(2002)に開発され、アジア航空株式会社が特許を保有していましたが、この特許の期限満了により自由に利用できるようになりました。その後、令和６年の能登半島地震で多発した土砂崩れの場所をいち早く確認するために能登全域の赤色立体地図が調査用に公開されました。一般向けにも令和７年６月から一部地域で赤色立体地図を見られるようになり、令和８年１月時点で石川県内は能登全域に加え、加賀の山岳部ほぼ全域を見ることができます。

山城の被害調査が一段落して新たに行く山城の候補を考える過程で、赤色立体地図が一般でも使えることに驚喜して気になる山城を次々と見ていた時、ふと朴坂越を含む南砺市側の山岳地域が公開されていることに気が付きました。その時点では金沢市側に位置する砂子坂道場や荒山城周辺はまだ公開されていませんでしたが、１０月に入ると金沢市側も一部追加公開されて調査する予定であった峠道が地図上でほぼ辿れるようになりました。前回発見した峠道は、予想していた通り尾根に沿って南へと続き、笠取山付近で細く不鮮明になって見えますが砂子坂道場から延びる釜中越と合流していました。

そして後日には三角点を検索するサイト（基準点成果等閲覧サービス）を見つけ、前回発見した朴坂峠付近の三角点の名称が「坂本山」であると分かりました。文献で使用されるのは見たことがない名称ですが、識別しやすいように本寄稿では地点名として使用することにします。

現在忘れ去られている坂本山から笠取山までの峠道全体を踏査したい思いはありますが、実際に歩いてみないと道の状態や藪の密度は分かりません。本当に峠道であるのか、それに加えて赤色立体地図で

道のすぐ脇に見える幾つもの平坦地が何であるのかを確認する必要がありました。



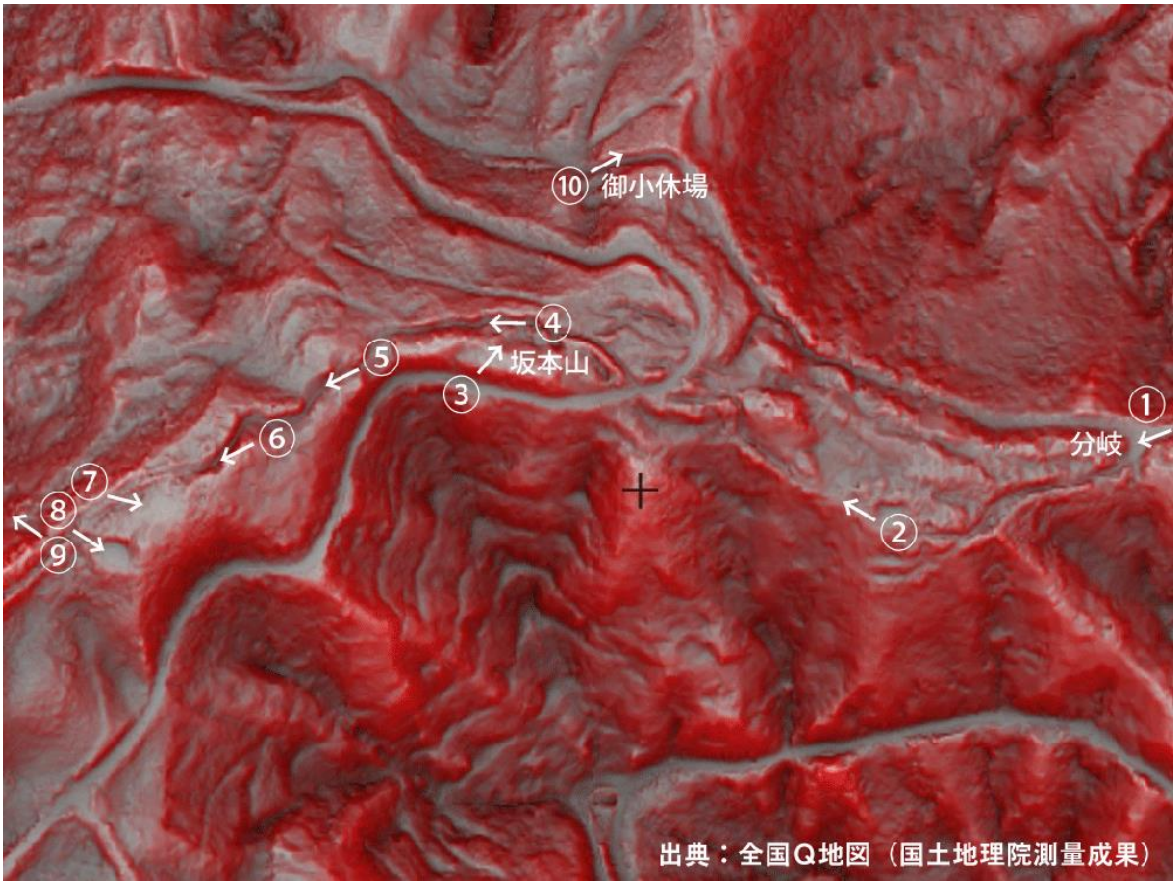
図Ⅰ. 三角点「坂本山」から笠取山までを含む赤色立体地図に加筆

３．峠道を踏査して釜中越との関わりを考える

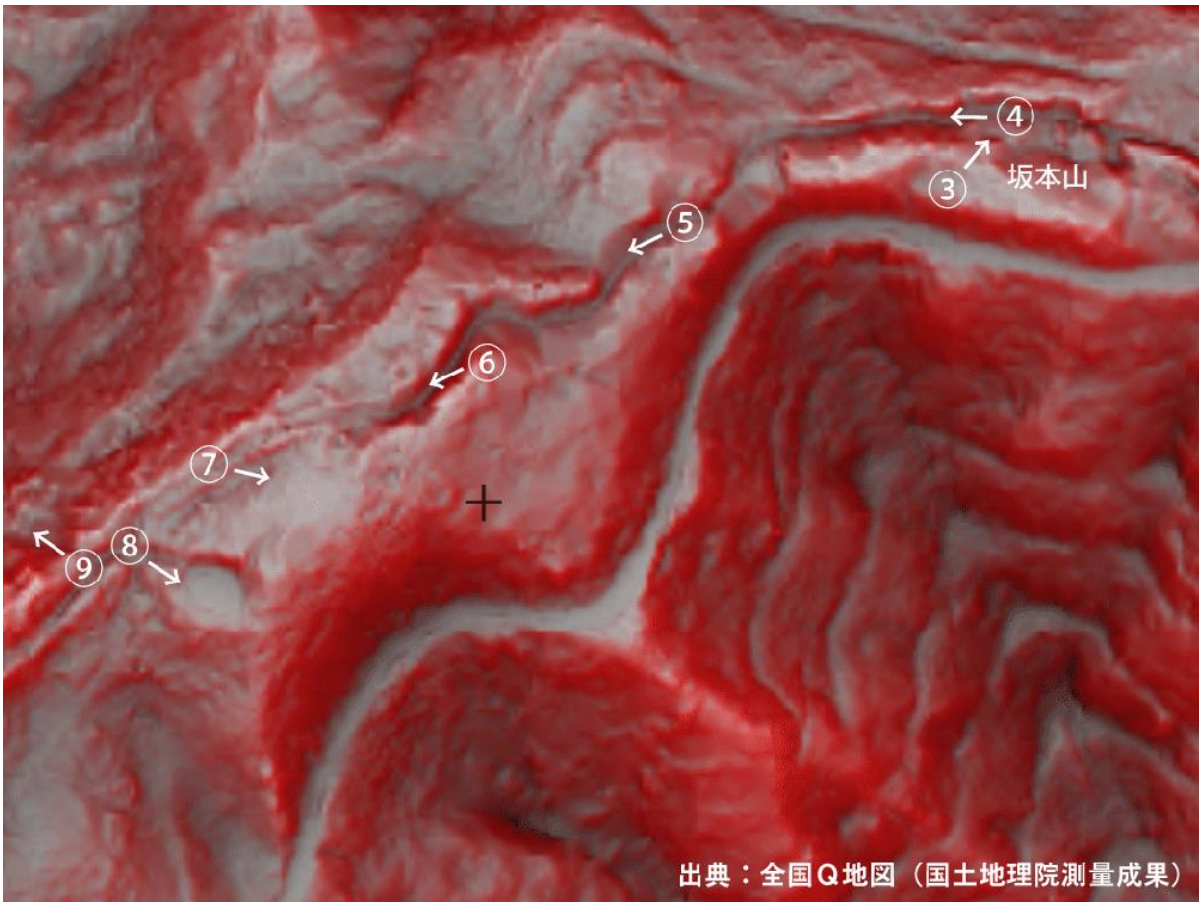
令和７年１１月中旬、絶好の山歩き日和となった１日を狙い、前回と同じ南砺市坂本から殿様道（朴坂越）を登り、踏査の出発地点にあたる三角点「坂本山」に向かいました。殿様道と分岐して坂本山方向（写真①左方）に進むと尾根には高圧鉄塔が建てられ（写真②）、点検する社員以外はほとんど誰も歩かないのと日光を遮るものが少ないために鉄塔から先には藪が立ち塞がっていました。この辺りは前回も歩きましたが、能登半島地震以降は獣すら歩かなくなったのか藪が深くなった気がします。それをかき分け舗装道路に出てそのまま横切って尾根へと登り、三角点に到着しました（写真③）。

写真①　坂本山（左方）と殿様道の分岐地点図

写真②　坂本山手前の高圧鉄塔周辺



図Ⅱ. 今回踏査した三角点「坂本山」付近の赤色立体地図に加筆（図Ⅰ右上部分拡大図）



図Ⅲ. 坂本山から踏査した峠道部分の赤色立体地図に加筆（図Ⅱ拡大図）

気合を入れ直して三角点から下の峠道に降りました（写真④）。窪んだ峠道は下草が枯れて、南側の尾根の影となるためか笹竹もまばらに生えているだけでしたのでこの状態が続けば歩けそうでした。ふと目の前の木に登山道でよく見かけるピンクリボンが結んであるのが目に入りました（写真④中央やや右上）。舗装道路から途切れている峠道になぜリボンが結んであるのか疑問を抱えつつ歩き始めました。

写真③　三角点「坂本山」から峠道を覗く

写真④　三角点直下峠道に入る

笹竹をかき分けつつ緩やかな登り道を歩いて行くと、またピンクリボンが目に入ってきました（写真⑤中央やや左上）。この辺りまでの道は道幅や掘られた斜面の角度が今まで歩いた峠道によく似ていて、かつ長年放置されていたと考えられるのに道として十分に今でも使えることから、かつては大勢が歩いた峠道であると確信を得ました。

前回の寄稿内で峠道たる重要な要件として、一に進む方向に迷わず、二に一度整備したら現状が長く続くこと、土崩れや倒木によるメンテナンスが最小限で済むことを挙げました。この峠道は尾根筋の近くを通るため進む方向がわかりやすく、上部から土砂が崩れて埋まる危険性が少なく、人の往来さえあれば下草も生えにくいため、私が考える峠道たる重要要件を備えていました。

さらに進むと、前方で堀切状の道から尾根筋を歩く道へと変わるようでした（写真⑥）。

写真⑤　峠道途中

写真⑥　峠道から尾根上へ

尾根筋の道は自然のままの尾根を歩く道ではなく堀切状の窪みが少し残る状態で、日光がよく当たるせいか来た道以外の三方を背丈より高い笹竹が密集して立ちはだかっていました。藪に突入して左手を見やると高圧鉄塔が建っていました（写真⑦）。赤色立体地図で最初に見えるはずの平坦地がここであっ

たので、堀切状の峠道が浅くなった原因も鉄塔用地の整備によるものと考えます。

浅くなった道の窪みを見失わないように密集した笹竹を全身でかき分けつつ進むこと２０数m、下草の短い笹竹が生えていない尾根道にやっとのこと出ると右前方に金沢平野が見えました（写真⑨）。振り返ると赤色立体地図では先の高圧鉄塔の平坦地から一段低い平坦地に別の高圧鉄塔が建っていました（写真⑧）。近い場所に高圧鉄塔が並んで建てられているのを確認したことで、赤色立体地図で見える平坦地は近代の高圧鉄塔の建設用地という確信を得ました。

写真⑦　平坦地に建つ高圧鉄塔写真

写真⑧　平坦地に建つ高圧鉄塔２

前方の上りに堀切状の道が続いているのが見えましたが、そこまでの道中には深い藪が再び立ちはだかり、しかも藪に棘が混ざっていました。少し踏み入ると大量に刺さり、前日までの山城踏査の疲れと直前の藪漕ぎで体力の消耗が激しかったこともあり、２つ目の鉄塔の巡視路で舗装道路に降りる決断をしました。約２００m程でしたが踏査の結果、峠道の一部は今でも高圧鉄塔の点検・整備をするための巡視路として利用され、目にしたピンクリボンは登山道ではなく、巡視路の目印であったと理解しました。

舗装道路まで降りて道路を下り、出発した坂本山も通過して殿様道から無事下山しました。

１１代前田斉泰が安政３年(1856)、総勢 1830 名程のお供を従えて越えた殿様道の御小休場からは、その日も砺波平野を眺めることができました。ただその場所に建てられていた「朴坂峠」の案内板は、前回は崖側にありましたが、令和５年８月にかほく市・津幡町・小矢部市・南砺市などに線状降水帯がかかった集中豪雨の時か令和６年の能登半島地震で崖崩れに伴って落下し破損したようで、崖側には接近注意のロープが張られて尾根側に新しい案内板がありました。

写真⑨　峠道から金沢平野の眺望

写真⑩　斉泰の御小休場から砺波平野の眺望

４．今回の踏査を踏まえて金沢・南砺間の峠道を考える

今回の踏査の結果、前回見つけた峠道は朴坂峠付近にある坂本山と笠取山付近にあった鎌中峠をつなぐ峠道であると確認できました。それでは、この忘れ去られている峠道の役割は何かを考えるにあたり、金沢市と南砺市の県境を越える周辺の峠道を含めて広く捉えてみたいと思います。

「医王が語る」には、峠道を越える２つの地元民の話と４つの著者の考察が書かれています。

１）西麓の田の島の古老はかつて福光へ越えるのに村の裏から西尾を登り、白兀頂上から鳶岩方向に進んで三蛇ガ滝上流の松尾谷へ下り、谷をすこし下って梯子坂を登り返して祖谷へ下りたという。

２）東麓小山の老女の話では若い時分、村からヤマタロ道を登って笠取山を越え、熊谷に田植えの手伝いに行ったという。

３）加越能文庫所蔵の近世絵図には、福光町祖谷から舘を通り城山を右に見て登り、堂辻山（三千坊）への道を左に分け、笠取付近にあった鎌中峠を越え、ほぼ県境の尾根続きに下り、岩坂付近で二俣街道に合流するルートが描かれている。

４）小山、山本からも古くから笠取へ登る道があり、ことに山本からの道は牛馬が通った様子をしのばせる深く掘り込まれた古道のすがたを見せ、しかもその山道が平野部に出る地点にかつて福光移転前の城端別院善徳寺が位置した。天保１１年(1840)の「加越能三州細密絵図」越中の部には舘から城山を左にみる小山寄りのルートが朱線で引かれている。

５）松寺永福寺の縁起（蓮如上人開基蓮真対座之名号縁起）に、文明３年(1471)二俣で布教中の蓮如を害さんものと、旧仏教の皆住院住職寂静（道海）が才川山中の自坊を立ち出で、釜中越を二俣へ向かう場面がある。

６）享保１３年(1728)城端の絹屋清左衛門から医王銀山採掘願いが藩に出された。そして、同１６年４月に金山祭りが行なわれた記録がある。

それぞれのルートを検討する前に峠道を整理します。

１．二俣越　金沢と二俣村をつなぐ峠道で若松村、田島村を経由する「オコ谷越」と大樋村、御所村を経由する「三ノ坂越」を指しますが、かつては若松から小又村までをいう「オコ谷越」が本道で「三ノ坂越」は二俣村でオコ谷越に合流する間道と認識する時期があったようです。加賀では峠道の多くが国境（現在の県境）までの名称であることを考慮して本寄稿では後者の認識を使用します。

２．朴坂越　坂本村と二俣村をつなぐ峠道で坂本山付近にあった朴坂峠を越える。先の小又村までを「オコ谷越」と認識する時期には坂本村と小又村までと認識されていたようです。文政年間に和泉村石崎市右衛門が坂本村から二俣村までの道筋に観音石仏を安置し、この道を前田斉泰が通ったことが重なって殿様道＝朴坂越は坂本村から二俣村までという認識が東麓の南砺市側で定着していったものと考えています。本寄稿では別に朴坂峠から小又村までを「小又道」、笠取山から朴坂峠を経由して坂本村までを「坂本道」と仮称して使用します。

３．釜中越　オコ谷越の分岐から鎌中峠を経由して南砺市側に下る峠道。峠名としては「鎌中」、道名としては「釜中」の文字を宛てるのが一般的です。下り道は先の「坂本道」、吉谷川沿いに山本村に下る「吉谷道」、明神川沿いを小山村に下る「小山道」とそれぞれ仮称して本寄稿では使用します。

４．白兀越　大菱池村から白兀山山頂付近を越えて菱池乗越（現在の夕霧峠）から糸谷新村に下る峠道。医王山を横断する険しい峠道で、本寄稿では菱池乗越から糸谷新村までを「糸谷新道」と仮称して使用します。また、白兀山手前で鳶岩方向に分岐し金山峠を越える間道があり、本寄稿では「金山道」と仮称して使用します。

5．祖谷道　祖谷村から堂辻山までの峠道で現在の祖谷登山道に重なると考えられます。さらに金山峠を越えると大池平に至り、大池平から二俣村に下りる間道（現在ルート不明）がありました。

整理した峠道を踏まえて「医王が語る」所収のルートを検討すると、

1）田島村→白兀越→（仮）金山道→祖谷道→祖谷村→福光村

2）小山村→（仮）小山道→釜中越→熊谷（くまだんと読むようですが該当する地名がなく車村のことか）

3）祖谷村→祖谷道→釜中越→オコ谷越

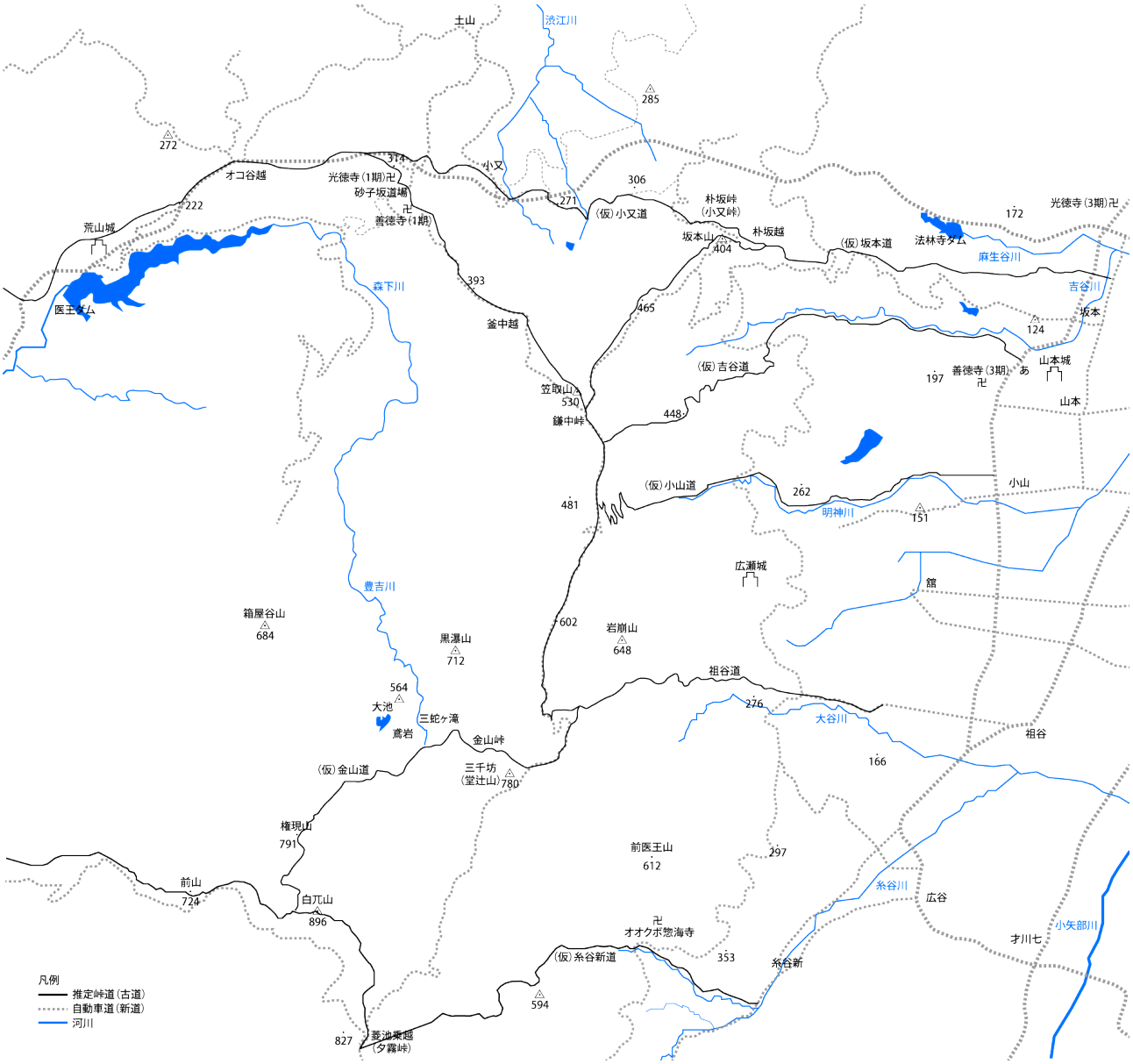
4）山本村→（仮）吉谷道→釜中越

　小山村→（仮）小山道→釜中越

5）才川七村→祖谷道か？→釜中越→オコ谷越→二俣村

6）城端村→祖谷村→祖谷道→（仮）金山道→鉱山は大池平か？

というルートが想定されます。



図Ⅳ. 金沢市と南砺市の県境を越える峠道（古道）と現道・河川の合わせ地図

以上の想定ルートから釜中越として共通することは笠取山付近にあった鎌中峠を越えることだけであり、確定できる道は笠取山からオコ谷越の分岐までとなります。南砺市側に下るルートは鎌中峠付近とされる笠取山が最高所となる標高だと想定すると、今回踏査した（仮）坂本道のほか、（仮）吉谷道、（仮）小山道が該当し、祖谷道は（仮）金谷道方向と分岐する尾根付近で笠取山より約１００m高くなるので除外されます。これに私が考える峠道の重要要件を加味すると、最初期の釜中越はオコ谷越分岐から笠取山（鎌中峠）を経由する（仮）坂本道ではなかったかと考えます。遠回りになりますが尾根筋近くを通るので迷いなく、下りも川沿い（谷筋）を通らないことから災害時の整備回数も減らせるという理由です。時代が下り最短ルートの（仮）小又道が使用されるようになると、釜中越は（仮）吉谷道や（仮）小山道を使って坂本村より南側に下ることが増え、鎌中峠から登り返してでも下りに急勾配の少ない祖谷道も使用されることがあったと推測します。白兀越や（仮）金山道、祖谷道は医王山の真言系修験者が山麓の檀越を行き来し山中を修行した道であったと考えられるので、祖谷道が釜中越経由で使われ始めるのは真宗の越中布教が進められた１５世紀以降ではないかと思います。（仮）坂本道が最初期の釜中越であったと考える別の理由は、（仮）小又道が小又村で渋江川に合流する谷川を２本越える必要があるからです。谷筋を通ることすら斜面上部からの土崩れや倒木による整備が増える懸念があるのに、川をまたぐのは谷斜面に加え河川上流からの土石流や流木による整備が増える懸念があり、また水量は普段少なくても橋を架ける手間や増水への対応が必要となるからです。（仮）坂本道のうち笠取山から坂本山までの道の衰退は、中世に人々の移動に対する意識が“道中の安全”から、土木技術の進化を伴い“時短“に変化したからではないかと考えています。

忘れてはいけないのは開発の手を逃れた峠道も今見られるのは使用された最後の姿だということです。江戸時代に作成された絵図に記載したものがない笠取山から坂本山までの道は、中世に衰退しその時代の記憶を留める貴重な文化財なのかもしれず、また朴坂越が現在残る記録から（仮）小又道を通る道とされていても、鎌中峠に向かう（仮）坂本道を朴坂越（この場合は朴坂道か）と呼んだ時代があったのかもしれないと考えています。

余談になりますが、釜中越の名称の由来について笠取山近くにあった鎌中峠を通るからという以外の理由を書いた文献を見たことがありません。最高所となる峠の名称ということではよくある峠道名です。では、この鎌中峠の由来は何でしょう。全く根拠のない解釈かもしれませんが、私はこの峠を基点として曲がる峠道が農具の鎌の形に似ていたからではないかと考えています。オコ谷越の分岐から笠取山までの国境に沿う尾根道が鎌の柄の部分であり、この先折れ曲がった刃の部分が南砺市側に下る道、そう考えると（仮）坂本道も（仮）吉谷道、（仮）小山道も鎌の刃のように見えてきませんか。

５．中世の砂子坂道場と荒山城の峠道との関わりを考える

朴坂越や釜中越の往来が増えた最初の契機は真宗の北陸布教ではなかったかと思います。本願寺５世綽如が井波瑞泉寺を開いた以後も越中では真宗の布教がなかなか進まず、瑞泉寺でさえも長らく浄土宗系の念仏を修する堂として時宗徒など在地の檀越が管理している状態であったようです。８世蓮如の時代、門徒が増えた加賀から越中に入る道として重要視されたのが朴坂越や釜中越でした。金沢から井波瑞泉寺までの距離の他に、官道である北陸道の倶利伽羅越ほど峠道の通過に国守（領主）の監視の目が厳しくなかったこともあったのかと思います。そこで、加賀側の前線拠点として二俣本泉寺を開き、越中布教の起点として土山御坊を開きました。砂子坂道場はオコ谷越（朴坂越）から分岐する釜中越の入口に最初は加賀門徒によって築かれ（後の光徳寺）、約３年後に本泉寺室の身内が入りました（後の善徳寺）。しかし、善徳寺は３年ばかりで移転したので道場は長らくは加賀一向一揆の勢力下にあったものと

思われます。以前私はこの砂子坂道場付近の幅広な釜中越を、殿様道として再整備された朴坂越の間違いなのではないか、と考えて朴坂越や二俣越を調べ始めました。今は釜中越とオコ谷越（朴坂越）の分岐は道場の小又村寄りではなく荒山村寄りであることが明らかになったので、釜中越で間違いないと考えています。では、この辺りだけ幅広な理由は「加賀一向一揆関連遺跡と古道調査報告書」が主張する防御施設として構築した堀を後世釜中越として利用したからではなく、一向一揆が敵対する福光石黒氏や越後長尾氏が直下のオコ谷越（朴坂越）を通るのを監視する目的で、当初も堀切状であった釜中越の北側斜面を身を潜める土塁として利用するために、北側に拡張した結果ではないかと考えています。

天正１２年(1584)加賀・能登領主前田利家と越中領主佐々成政の間で軍事的緊張が高まった時、成政は高木場に移転した旧土山御坊の一角に築いた御峰城を後詰めとして荒山城に最前線を置きました。荒山城でオコ谷越（朴坂越）を抑えることで加賀からは釜中越をも封鎖でき、広瀬城などの越中の在地国人も成政に味方したことで、加賀門徒の拠点である砂子坂道場は往来が途絶えて無視できる存在になっていたと考えられます。その頃すでに加賀一向一揆は前田氏の支配下に入り、道場は真宗布教の寺院としての性格が強くなっていたと考えられますが、翌年加賀と越中がともに前田氏の領国となって荒山城は廃城、同１８年不幸にも砂子坂の堂宇が落雷で焼失するに至って、加賀門徒の助けで光徳寺は二日市村に移転して砂子坂道場も廃絶しました。

表Ⅰ.朴坂越・釜中越に関係する真宗・大名の動向と近代道路建設による朴坂越衰退の年表

和暦(西暦)	出来事
明徳元年(1390)	5 世焯如　井波に瑞泉寺を開く。
嘉吉 2 年(1442)	6 世巧如の三男如乗　二俣に本泉寺を開く。
寛正元年(1461)	如乗没。如乗子如秀尼と結婚して 8 世蓮如の次男蓮乗が本泉寺住持を継ぐ。
文明 3 年(1471)	蓮如　北陸に布教する(～文明 7 年)。二俣本泉寺で蓮乗と会う。 如乗室勝如尼(焯如の三男周覚の娘)　土山御坊を開く。8 世蓮如の四男蓮誓を入寺させる。 高坂次郎尉が吉崎で蓮如から道乗という法名と阿弥陀如来の御絵像を授かり、砂子坂道場を開く(後の光徳寺)。
文明 6 年(1474)	蓮如　吉崎御坊に入る(翌 7 年退去)。 周覚の孫道真が砂子坂道場に入る(後の善徳寺)。 文明の一揆　富樫政親が加賀一向一揆の力を借り弟の幸千代を敗る。
文明 7 年(1475)	蓮如　蓮乗を伴い瑞泉寺を訪ねる。 蓮乗　病にかかり文明 9 年までの間に本泉寺を田島に移す。
文明 9 年(1477)以降	道真　法林寺(法輪寺)に寺基を移す(法輪寺善徳寺)。
文明 13 年(1481)	蓮乗　この年までに本泉寺を平尾へ移す。 田屋川原の戦い　福光石黒氏・医王山惣海寺勢が井波瑞泉寺・土山御坊の一揆勢に敗れる。
文明 18 年(1486)	蓮誓　この年までに土山御坊を次男実玄に譲り、加賀の山田光教寺に入る。
長享元年(1487)	蓮如の七男蓮悟　蓮乗から継いだ本泉寺を若松に移す。
長享 2 年(1488)	長享の一揆　富樫政親が加賀一向一揆に敗れる。
延徳元年(1489)以前	善徳寺　山本に寺基を移す(山本善徳寺)。
明応元年(1492)	蓮如の十男実悟　生後 100 日のうちに蓮悟の養子として二俣本泉寺へ下向する。
明応 3 年(1494)	蓮誓　土山御坊を高木場に移す(高木場御坊)(勝興寺の寺伝)。しかし蓮誓は文明 18 年までに山田光教寺に入寺しているのでそれ以前という説もある。
永正元年(1504)	蓮乗　若松本泉寺で亡くなる。

永正 3 年(1506)	九頭竜川の戦い　越前・加賀・越中の一向一揆勢が越前朝倉氏に敗れる。越前から真宗寺院退去。 般若野の戦い　越中一向一揆が長尾能景を敗る。
永正 16 年(1519)	実玄　勝興寺の寺号を認められた高木場御坊を安養寺村に移す。
享禄 4 年(1531)	享禄の錯乱(大小一揆)で本泉寺方が敗れる。
天文年間(1532-55)	善徳寺　山本から福光に移る(福光善徳寺)。
天文 15 年(1546)	金沢御堂建立。
永禄 2 年(1559)	善徳寺　福光から城端に移る(城端善徳寺)。
元亀 3 年(1572)	尻垂坂の戦い　加賀・越中一向一揆が上杉謙信に敗れる。
天正 8 年(1580)	11 世顕如　大坂本願寺を退去する。
天正 9 年(1581)	佐々成政により井波瑞泉寺焼亡。瑞泉寺は北野に退転する。
天正 10 年(1582)	顕如の長男教如が城端善徳寺を訪れる。
天正 12 年(1584)	佐々成政が寺領を寄附し、勝興寺が古国府に移る。 佐々成政と前田利家が対立し、加越国境が戦時体制となる。
天正 13 年(1585)	佐々成政が羽柴秀吉に降伏する(富山の役)。
天正 18 年(1590)	砂子坂の堂宇は落雷により焼失する。
文禄 4 年(1595)	光徳寺　砂子坂から田近郷二日市村に移る。
慶長 18 年(1613)	瑞泉寺　井波に再建する。
慶長 19 年(1614)	光徳寺　二日市村から法林寺に移る。
文政年間(1818-29)	十村の和泉村石崎市右衛門(7 代)が坂本村から二俣村までの道筋(朴坂越)に西国三十三番札所の観音石仏 33 体を安置する。
文政 12 年(1829)	石崎市右衛門の願い出により、川合田村織田與三左衛門が頭取となって道(朴坂越)を二間(約 3.6 m)幅に広げ石畳を敷くなど工事が行なわれる。
安政 3 年(1856)	前田斉泰は総勢 1830 名程のお供を従え江戸から金沢への帰国に際し、福光の宇佐八幡宮に参拝して朴坂峠を越える。
明治 19 年(1886)	福光・金沢間で馬車が通行できる高窪越往来が完成する。朴坂越を通る人が減る。
明治 44 年(1911)	金沢第九師団の兵馬や車両が立野ケ原演習場に向かって行軍する二俣・福光間に新道(兵隊新道)が開かれる。二俣越・朴坂越の一部が道路建設により消滅する。

６．終わりに

前回寄稿した時点では朴坂越の調査には３回以上かかると思って前・後半とはせず、発端を現す「緒」と付けました。それから２年、運良く赤色立体地図の一般公開という機会を得て、地図上で確認できることが増えて朴坂越に関する調査は私の中で一気に進みましたので２回をもって一旦区切りを付けることにしました。今後も興味の幅を広げて新しい知見を披露する機会を得たいと考えています。

参考資料

・全国Ｑ地図（国土地理院測量成果）　https://info.qchizu.jp/qchizu/tile/rrim/

・基準点成果等閲覧サービス　https://service.gsi.go.jp/kijunten/app/map/

・医王山文化調査報告書　医王は語る（1993 年・富山県福光町・医王山文化調査委員会）

・加賀一向一揆関連遺跡と古道調査報告書（2019 年・金沢市）　　他、きくざくら第３３号拙稿参照